

# 日本宗教学会 第78回学術大会

## パネル発表要旨集

学術大会 会期：2019年9月13日(金)－15日(日) 会場：帝京科学大学 千住キャンパス

開催パネル一覧 場所：本館 2階/3階/4階

9月14日(土) 14:00～	パネル題目	代表者
第1部会	近代西洋的「宗教」概念をヨーロッパから相対化する	伊達 聖伸
第2部会	人とモノの現代宗教－意味づけから消費へ－	岡本 亮輔
第3部会	近代における暦・国家・宗教	岡田 正彦
第4部会	Reconsidering the Role of Biography in the Study of Modern Japanese Buddhism	Orion KLAUTAU
第11部会	宗教現象学の歴史的展開に関する批判的再検討	奥山 史亮

9月15日(日) 13:15～	パネル題目	代表者
第1部会	Lived Ancient Religion: Circum-Mediterranean World	MATSUMURA Kazuo
第2部会	生命操作時代の宗教と宗教学－宗教的生命観を鍛え直す－	安藤 泰至
第3部会	親鸞と日本主義の間	近藤俊太郎
第4部会	近代仏教と遠忌－インフラ・国家・メディア－	武井 謙悟
第5部会	イスラーム中世における神認識	澤井 真
第6部会	近代宗教政策下における「教団」未満の宗教者たち	石原 和
第7部会	越境する教派神道－組織化における交渉・葛藤・分裂－	弓山 達也
第8部会	宗教研究における井筒「東洋哲学」とその展開	澤井 義次
第9部会	宗勢調査の可能性と個別課題へのアプローチ	川又 俊則
第10部会	陰陽道祭祀の形成と展開－奈良暦師吉川家文書を中心に－	梅田 千尋
第11部会	娯楽メディアと宗教表象－インド映画に現れた宗教世界を中心に－	山下 博司
第13部会	人工知能の社会実装化が提議する宗教的問題	木村 武史

パネル趣旨本文は、提出された原稿をそのまま掲載するのを原則としています。

## 近代西洋的「宗教」概念をヨーロッパから相対化する

代表者：伊達 聖伸

西欧型政教関係の課題の変遷と分節化－英独仏西を比較する－ 伊達 聖伸 (東大)  
イタリア型政教関係の特殊性－「ライチタ」と「ライシテ」－ 江川 純一 (明治学院大)  
ロシアの「多宗派公認体制」からみる西欧の政教関係 井上まどか (清泉女子大)  
多宗教社会ボスニア・ヘルツェゴビナからみる西欧の政教関係 立田由紀恵 (多摩大)

コメンテータ：矢野 秀武 (駒大)

司会：伊達 聖伸 (東大)

「宗教」(religion)概念が近代西洋プロテスタントの産物であることが、日本の宗教学・宗教研究の「常識」になって久しい。だが、日本の文脈では、とすると「西洋近代」や「欧米」が十把一絡げにされることがある。実際には、「欧」と「米」はかなり異なるし(Berger, Davie & Fokas, 2008)、ヨーロッパ内部も実に多様である。ヨーロッパにおける世俗化過程の複数のパターンをモデル化したD・マーティンの古典的研究(Martin, 1978)から近年のさまざまな研究成果に至るまで、ヨーロッパ内部を比較する多くの研究がなされてきた。

本パネルが目指すのは、そうした近年の研究成果に学びつつ、日本においてなされるヨーロッパの宗教に関する研究が、ただのキャッチアップを越えたアップデートになるにはどうすればよいのかを考えることである。比較的すぐに思いつくのは、「ヨーロッパにおける非西洋」としての「他者」(特にユダヤ教徒やムスリム)に注目して西洋モデルを相対化する戦略であろう。だが本パネルでは、あえてヨーロッパ各国・各地域の政教関係をモデル化して取り出すアプローチを意識したい。これは、内部からの相対化は日本における研究上の盲点になっていると思われることによる。また、内を精緻に把握することと外からの叙述が精緻になることは連動しているはずだという見通しにも基づいている。

司会兼第1発表者の伊達聖伸は、上記の問題提起を行なったあと、西ヨーロッパの4つの国(イギリス、フランス、ドイツ、スペイン)を比較しながら、近世(16～17世紀)・近代(19世紀)・現代(20世紀後半以降)における政教関係の中心的課題を抽出し、各国の政教関係をモデル化して提示する。

第2発表者の江川純一は、イタリアからカトリック的な南欧モデルを提示し、第一発表との比較と相対化を試みる。具体的には、1861年の近代国家成立時の政教関係、1923年のラテラーノ協約(コンコルダート)、1984年のヴィッ

ラ・マダーマ協約の検討を通じ、イタリアにおける政教関係の変遷を跡づけたうえで、自国の「ライチタ」とフランスの「ライシテ」の差異に関するイタリア国内の言説を検討して考察を加える。

第3発表者の井上まどかは、正教圏のロシアの政教関係モデルを提示し、西欧型の政教関係の特殊性を逆照射する。ロシアの政教関係は、歴史学を中心に「宗派国家」(ロバート・クルーズ)や「多宗派公認体制」(ポール・ワース)などの用語で説明されてきた。たしかに、革命前のロシアの政教関係も、ソ連解体後の「宗教復興」も、この用語で説明できる面は少なくない。だが、近年ではロシアの政教関係を「コンコルダート」体制とみなす言説も登場してきている。発表では、これらの用語で把握されるロシアの政教関係論と西欧型との差異を考察する。

第4発表者の立田由紀恵は、ボスニアを中心に、中東欧から西欧モデルの相対化を試みる。この地域は、イスラーム、セルビア正教、カトリックの3つの宗教がマイノリティ・マジョリティの区別なく同等に共存してきた伝統を持つ点において、ヨーロッパの大半の国家と異なる。また、それぞれの宗教がネーションとして国内の政治的単位を形成するボスニア・ヘルツェゴビナでは、宗教と政治を切り離すことができず、政教関係の前提もヨーロッパとは別の文脈にある。その点から西欧型の政教関係を相対化して考察を加える。

コメンテータの矢野秀武は、タイの政教関係を専門とする立場から、ヨーロッパの政教関係を改めて比較の視座に置きなおすためのコメントを行なう。ある国家の政教関係は、しばしば国教体制・公認宗教体制・政教分離体制などの用語を用いて説明されるが、その用語で指し示される実態は多様であり、用語の概念自体の限界も指摘しうる。そのような観点から、ヨーロッパおよび非ヨーロッパの政教関係の多様性を、より適切なモデルでとらえ返すための提言を行なう。

## 人とモノの現代宗教—意味づけから消費へ—

代表者：岡本 亮輔

なぜ神木に抱きつくのか—宗教的パフォーマンスを生み出す環境— 岡本 亮輔 (北大)  
モノが立ち上げる宗教伝統—現代の山伏を事例に— 天田 顕徳 (東京工芸大)  
モノが生み出すつながりとその変容—津軽地方を例として— 村上 晶 (駒大)  
貨幣と礼拝—鑑賞的聖地における入場料と賽銭の〈あいだ〉— 門田 岳久 (立教大)

コメンテーター：山中 弘 (筑波大)

司会：岡本 亮輔 (北大)

2000年代以降に顕著になった宗教現象においては、預言者やカリスマといった宗教者はそれほど目立たなくなっている。とりわけパワースポット・御朱印・スピリチュアル・宿坊などのブーム化した現象では、個々人の趣味嗜好が強く反映される。そして、スピリチュアリティ研究や宗教とツーリズム研究は、個々人の宗教的自律化を前提に、細分化された宗教が消費される諸相を描き出してきたが、他方で常に信仰に焦点をあててきた。何らかの信念を保持受容するという心理的過程が、暗黙のうちに宗教の本質として想定されている。本パネルでは、こうした心理的過程そのものではなく、あたかもその背後に信念の受容保持があるように見せかける実践や物理的環境に注目してみたい。

手がかかりとなるのは「浅い宗教経験」や「軽い宗教」といった概念だ。門田によれば、スピリチュアリティやパワースポットは「ほどほどの宗教体験」をするために市場に出回る商品だ。消費者は何か深い体験を求め、その第一歩としてこれらを購入するわけではない。適度な体験で健全に満足するのだ。また山中は、現代宗教について、漠然とした「探求」という「需要側の不定形な欲求」が市場論理の下に編集され、それが特定の宗教実践に結実していることを指摘した。明確な宗教的信念が先行して存在するのではなく、ツーリズム産業などの文化産業によってイメージ化され、商品化された宗教が消費されており、それらは軽い宗教と呼べるというのだ。本パネルでは、以上のような理論的枠組みの下、現代宗教を構成するモノや環境に注目する。

岡本報告では、本パネルの問題設定の確認後、寺社参拝を事例として、市場やメディアが生み出した諸実践に注目する。2000年代以降、パワースポットがブームになることで、御朱印集めや神木への手かざしなどが、ある種の参

拝のフォーマットになりつつある。これらの実践は時に寺社側と軋轢を生じつつも浸透してきている。宗教的に自律化した参拝者と寺社の相互作用に注目しながら、そのプロセスを分析してみたい。

天田報告では、現代の山岳修行者の実践を取りあげる。とりわけ、彼らが修行の際に身につける装束や持ち物と、彼らの実践の関係に注目する。現代の山岳修行において、伝統的な山伏装束一式を身につける山伏は稀で、多くがリュックサックや透湿防水性能の高い雨具など、現代的で世俗的なモノ身につける。こうしたモノに対する山伏の解釈や語りを分析することで、現代における山岳修行の特徴を示したい。

村上報告では、津軽地方の信仰実践におけるモノの役割について論じる。津軽地方の「カミ信仰の人」(信心深い人)たちの実践は、石や木などの自然物、神像や仏像、奉納絵馬など、多くのモノによって喚起され、また、モノを媒介として地域社会とつながってきた。しかし近年、市場論理の影響も受けながら、これらのモノの製作や流通の方法が変化している。こうした変化が人々の信仰実践にどのような変化をもたらすのかを考える。

門田報告では、貨幣の物質性に注目する。宗教における貨幣は、まず賽銭や献金の形で信仰心の象徴として理解されてきた。他方、「観光寺院」や聖地の入場料として徴収されると、代価として世俗的な意味を帯びる。物質としては不変の貨幣が、どのようにして世俗と宗教のあいだを揺れ動くのか。世俗化した聖地において「カネを払うこと」が宗教的実践になることはありうるのか。こうした問いを背景に、モノとしての貨幣が生み出す現代宗教を論じる。

そして以上の4報告に対し、山中は、ポスト世俗化を射程に入れた現代宗教論、宗教とツーリズムを軸とする宗教消費論の観点からコメントを行う。

## 近代における暦・国家・宗教

近代における皇紀の成立  
明治改暦再考  
国民の祝祭日と仏教の忌日－『仏暦一斑』と『神宮暦』－  
近代中国における暦政策と旧暦

代表者：岡田 正彦  
林 淳 (愛知学院大)  
下村 育世 (東洋大)  
岡田 正彦 (天理大)  
謝 荔 (法大)

コメンテータ：中牧 弘允 (吹田市立博物館)  
司会：岡田 正彦 (天理大)

国民国家の形成過程において暦は、国旗や国歌の制定、国語／標準語の統制などと同じように大きな役割を担うことになる。近代の日本においては、明治6年から元始祭、紀元節、天長節、新嘗祭などの祝祭日が制定されるとこれらは暦に記載されるようになり、国民意識の高揚に大きな役割を果たすことになる。この時期の暦の変遷を検討することは、近代社会の成立過程と暦、さらには宗教の関係性を考えるうえでも重要だろう。本パネルでは、近代における暦の形成過程を国家や宗教との関連において考察することによって、近代宗教史のこれまであまり注目されていない側面に光をあてたい。

林淳の発表は、近世から近代の思想史のなかで、太陽暦導入と同時に皇紀が成立したことの意味について考察する。近世において神武天皇即位を暦の起源としたのは、渋川春海『日本長暦』が最初であった。幕末になると水戸学で神武天皇即位二五〇〇年が意識され、明治5年の太陽暦改暦の布告で皇紀が採用されることになる。こうした皇紀の採用と太陽暦の導入の関係性について考察する。

下村育世の発表では、王政復古以来の改暦に関する言説を取りあげる。洋学者などによって論じられた多様な模索や意見のなかには、明治5年の太陽暦改暦に反映されたものもあれば、敢えて触れられないように見えるものもある。「置閏法」に不備があるとする従来の指摘を含めて、改暦の背景にあったこれらの諸見解について考察する。

岡田正彦は、皇室祭祀中心の年中行事を記した官暦に対抗して、庶民の生活に密着した仏教系の年中行事を記した仏暦を紹介しながら、暦と国家と宗教の関係について考察する。明治16年の暦から官暦は神宮司庁が独占的に発行することになったが、その一方で独自の暦を刊行する動き

があった。このパネルでは、大日本仏暦会社が刊行した『仏暦一斑』について、新たに発掘した史料を紹介しながら詳しく検討する。とくに仏暦に記された忌日と国民の祝祭日の対応関係に注目したい。

非会員枠で発表を依頼した謝荔は、近代における日中の暦政策がどのように変遷したのか、またそれが当時の旧暦情報をどのように特徴づけたのかについて、暦(略暦、理科年表、暦象年表、国民暦、国暦、暦書、農家暦など)の事例を提示しながら比較検討する。近代の日本社会と中国社会において、政治理念や国内外の情勢に関連する暦政策、さらには権力と民衆社会とのせめぎ合いの相違が、それぞれの社会の旧暦の存続に大きく影響している。旧暦をめぐる暦政策について、日中の比較を意識しながら考察する。

コメンテータの中牧弘允は、現在の宗教と暦に関する研究分野を代表する研究者であり、パネル全体を俯瞰した見取図を示してくれることを期待している。暦に関する広範な知識を背景として、各発表に的確な批評と助言を加えることによって、本パネルの議論を深めてくれるはずである。また、パネルに中国の事例のエキスパートである謝荔を迎えることで、日本の事例に限定することなく、広く近代における暦と国家と宗教の関連について検討することが可能になる。宗教学会の会員ではない謝氏に、異なる視座から話題を提供してもらうことによって、より議論が活発になることを期待している。

本パネルにおいて紹介されている暦に関連する事例の多くは、これまで宗教史の分野ではあまり取り上げられてこなかったものである。これからの新しい宗教研究の分野の一つとして、暦研究の重要性をより多くの研究者に理解してもらいたい。

国際委員会企画・日本宗教研究諸学会連合後援

## Reconsidering the Role of Biography in the Study of Modern Japanese Buddhism

Convener : Orion KLAUTAU

Nakanishi Ushirō: His Biography and the History of Religions	HOSHINO Seiji	(Kokugakuin Univ.)
D. T. Suzuki in Context: Overcoming the “Great Man”	Stefan GRACE	(Waseda Univ.)
Toward a History of Modern Buddhist Art: The Life of Sugimoto Tetsurō	Micah AUERBACK	(Univ. of Michigan)
	Commentator : MORIYA Tomoe	(Hannan Univ.)
	Commentator : John BREEN	(Nichibunken)
	Chair : Orion KLAUTAU	(Tohoku Univ.)

Intellectual biographies used to constitute a relatively common type of monographic study in the broader field of Japanese studies. However, in the last few decades these largely gave way to works which, rather than focusing on specific individuals, examine the development of particular terms or concepts. A possible explanation for this may lie in the very questioning of the ultimate value of biographical studies in the West: while the intersection between emic and etic will always play a role in the project planning of any competent scholar, one might say that the popularization of discourse theory made scholars far more aware of the pitfalls of conveying the “great man” image.

Nevertheless, the biographical approach—working to locate one’s subject more concretely in the socio-political context of his or her time and eschewing ideological categorization where possible—may also be able to open up new possibilities. This session intends to approach the issue from the perspective of the study of Buddhism in Modern Japan. By focusing on three cases—Nakanishi Ushirō (1859–1930), D. T. Suzuki (1870–1966), and Sugimoto Tetsurō (1899–1985)—we intend to explore how the diachronic approach to an individual’s thought may contribute to a re-envisioning of the field as a whole.

After a brief general introduction by Orion Klautau, **Hoshino Seiji**’s “Nakanishi Ushirō: His Biography and the History of Religions,” will focus on the life and times of one of the first characters to discuss the idea of “New Buddhism” in the context of modern Japan. While recent scholarship revealed that Nakanishi had a significant impact on Buddhist reform movements in mid-Meiji Japan, his biography has not yet been studied in depth. Hoshino will, in an attempt to broaden our current perspective on the “History of Buddhism” in modern Japan, consider the meaning of Buddhist reform movements in Nakanishi’s life with reference to his relation with other religious traditions in his later years.

**Stefan Grace**’s “D.T. Suzuki in Context: Overcoming the ‘Great Man’” takes up the subject of the individual largely responsible for concretizing in the West the idea that “Japan = Zen.” Traditionally in Suzuki studies there have been two distinct approaches. First, there is an emic approach that supports the narrative of Suzuki as the “great man” who spread Japanese culture to the West; and, second, there is a largely-deconstructionist etic approach that hinges on an orthodox vs. heterodox dichotomy. It may be said that the former is more common in Japanese scholarship, and the latter in that of the

West; however, what is of greatest importance is appropriately locating Suzuki’s thought within the socio-political context of his *own* time while avoiding the pitfalls of a unilateral approach.

**Micah Auerback**’s “Toward a History of Modern Buddhist Art: The Life of Sugimoto Tetsurō” will consider the work of this important artist, active from the 1930s onward. In his later years styling himself a “painter of religion,” he grappled with themes related to Buddhism. In particular, he continuously produced works related to the life of the Buddha Śākyamuni, among which may be adduced his great works on this theme, *The Veneration of the Relics (Shari kuyō, 1948)* and *Delusion and Paradise (Mumyō to jakō, 1969)*. The creation of these works is deeply related to his own life, and through an analysis of Sugimoto’s works, this presentation will explore the possibility of a history of modern- and contemporary-era Buddhist art as “research in biography.”

In order to ensure responses from perspectives as broad as possible, we have invited as discussants both Moriya Tomoe and John Breen, who specialize, respectively, in the history of Buddhism and Shinto. Moriya is author of *The Birth of American Buddhism (Amerika Bukkyō no tanjō, 2001)*, editor of vol. 3 of the *Selected Works of D. T. Suzuki* (2016), and co-editor, with Duncan R. Williams, of *Issei Buddhism in the Americas (2010)*. Besides *Rinzai layman D.T. Suzuki, she has also done extensive work on Shin Buddhist priest Imamura Emyō (1867-1932)* and Sōtō Zen’s Inoue Shūten (1880-1945), which give her a broad perspective from which to consider the role of biography in modern Buddhism.

**John Breen**, in turn, has authored a number of works on Shinto, including *Ritual and Power: the Emperor and the Meiji Restoration (Girei to Kenryoku: Tennō no Meiji Ishin, 2011)* and *Tales of a Sacred City: the Ise shrines in Modern Japan (Shinto monogatari: Ise jingū no kingendaishi, 2015)*. He is also co-author, with Mark Teeuwen, of *A New history of Shinto* (2010). As a world-renowned historian of modern Japanese religion, John Breen has emphasized in his works the importance of the biographical study of individuals such as kokugaku scholar Ōkuni Takamasa (1793-1871) and the Meiji Emperor himself.

This panel session is proposed by the Japanese Association for Religious Studies International Committee (*Nihon shūkyō gakkai kokusai iinkai*) and sponsored by the Japan Federation of Societies for the Study of Religions (*Nihon shūkyō kenkyū shogakkai rengō*).

## 宗教現象学の歴史的展開に関する批判的再検討

代表者：奥山 史亮

ファン・デル・レーウにおける宗教現象学方法論の形成過程  
エリアーデとエラノスにおける宗教現象学の学的連関  
ルドルフ・オットーと「宗教現象学」  
ハイラーにおける宗教現象学の受容と展開

木村 敏明 (東北大)  
奥山 史亮 (北海道科学大)  
藁科 智恵 (日本学術振興会)  
宮嶋 俊一 (北大)

司会：奥山 史亮 (北海道科学大)

宗教現象学は、宗教自体の探求を主題とするディシプリンとして20世紀初期から形成され、古典としてレーウ、ハイラー、オットー、エリアーデ等が挙げられることが一般的である。しかし彼らの間でも「宗教現象学」に対する評価は一律ではなく、そのことがこの学的輪郭を不鮮明なものにしてきた。宗教現象学が学界から後退した現代でも、その学的意義や代表的論者について一致した見解は示せていない。

現代では、認知科学的研究が台頭してきたが、それらは宗教の普遍的要素の抽出を目指す点で宗教現象学と問題を共有している。認知科学的研究の成果を如何に評するにしても、宗教自体を探求することは可能かという宗教現象学の問題提起を、古典的著作の分析を通して再検討することは、有意義な知見の提示につながるだろう。上記を踏まえ、本パネルでは古典的著作の分析から、宗教学全般にとって宗教現象学を批評することが持ち得る可能性に迫りたい。

まず木村がレーウについてまとめる。レーウの『宗教現象学』における「エピレゴメナ」は「宗教現象学」の方法論に関する数少ない本格的な記述としてしばしば注目され、時には批判的検討の対象とされてきた。しかし哲学的現象学、実存主義、生の哲学、構造心理学など多様な立場のパッチワーク的なこのテキストの内容は、どこに力点を置くかで多様な解釈を生み出し、十分な共通理解を得ることができず、そのことが今日も宗教現象学をめぐる議論に大きな影をおとしているように思われる。本発表ではこのテキストが『宗教現象学入門』『宗教現象学』という二つの著作の増補過程で繰り返し書き換えや追加を繰り返されてきた事実注目し、その多様な側面を整理することを試みる。

次に奥山がエリアーデとエラノスの連関から宗教現象学の展開を辿る。エリアーデは戦前、イオネスクの元で宗教現象学の基礎を学び、ペックツォーニからは宗教史学を受容し、両分野の統合を課題とした。しかし戦中、コン

グ、ケレーニイに接近する中で宗教現象学的傾向が強まり、エラノスに参加するようになると分析心理学と宗教現象学を重ね合わせ、その学的可能性を強調するようになった。ボーリングゲン叢書から刊行された著作には、特にその傾向が顕著である。エリアーデにおける「宗教現象学」の形成は、エラノスへの接近と同時的になされたものであり、両者の接近が宗教現象学の展開において果たした役割について考察を加えたい。

続いて藁科が、ドイツの神学者・宗教学者オットーについてまとめる。オットーは、「宗教現象学」という言葉で自らの研究を表現することはなかったものの、「宗教現象学」の中に位置づけられることが多い。どのような意味において彼をそのような位置に置きうるのか、という問いを念頭に置きつつ、哲学者エドムント・フッサールが『聖なるもの』に関して、オットーに宛てた書簡で述べた叙述を手掛かりとして、20世紀初頭の学問状況におけるオットーと「現象学」、あるいは「宗教現象学」との関係について考察を加えたい。

最後に宮嶋が、ハイラーについてまとめる。ハイラーはドイツ語圏における古典的宗教現象学派の重鎮と見なされてきた。初期の著作としては『祈り』(1918)が、また晩年の著作としては『宗教の現象形態と本質』(1961)があり、学説史的にはどちらも宗教現象学の代表作とされている。前者では方法論に関する記述中に「宗教現象学」への言及があるものの決して多くはない。後者では前者よりも現象学的方法が強調されているが、両著作における実質的な作業は宗教現象の類型学であり、ハイラー自身がどこまでそうした作業を「現象学的」と見なしていたか疑問がある。そのため、他の著作なども参照しつつ、ハイラー自身がどこまで自覚的に「宗教現象学」を行っていたのかを検証する。

質疑応答の時間を多く確保するためコメンテータは入れず、4人の発表後すぐに討論に移行する。

開催校企画

## Lived Ancient Religion: Circum-Mediterranean World

Convener : MATSUMURA Kazuo

The Concept of “Lived Ancient Religion”	Jörg RÜPKE	(Erfurt Univ.)
Making of the Concept of “Paganism” in the Later Roman Empire	NAKANISHI Kyōko	(Univ. of Tokyo)
Difference in Way of Living in “History Religion”	DOI Yumi	(Univ. of Tokyo)
What is Lived “Halakhic Religion”?	ICHIKAWA Hiroshi	(Univ. of Tokyo)

Commentator and Chair : MATSUMURA Kazuo (Wako Univ.)

Professor Jörg Rüpke is a Permanent Fellow in Religious Studies at the Max Weber Center, University of Erfurt, Germany. He is an authority on the religions of the ancient Mediterranean region, and has written many books on this topic, including *Pantheon: A New History of Roman Religion*, Princeton University Press, 2018 and *Religion: Antiquity and Modern Legacy*, I. B. Tauris, 2014.

The religious situation of the Mediterranean region is, even within the time-span of the late antiquity, very complex, since the Roman Empire consisted of an extensive territory extending from the British Isles in the west to the Pontic in the east, from Germania in the north to North Africa in the south. In the region, there were a large number of different kinds of religions: the official state religion of Rome, Emperor worship, many mysteries such as the Dionysiac, Eleusinian, and Mithraic mysteries, as well as Judaism and Christianity. The history of Roman religions has been a traditional branch of the history of religions since the beginning of the discipline, from Theodore Mommsen, Georg Wissowa, and Walde Fowler of the nineteenth century down to Franz Cumont, Kurt Latte, M. J. Vermaas, and John North in the twentieth century. Professor Rüpke is the latest inheritor of this honorable tradition.

He was in charge of the Conference of the International Association for Religious Studies held at Erfurt in 2015. At the Max Weber Center, under his leadership, a project titled “Lived Ancient Religions” was conducted from 2012 to 2017, and partial results of the project were published in the 2018 issue of the scholarly journal *Religion*, which included papers by twelve of the project members.

This idea of “Lived Ancient Religions” may be an effective tool for disengaging the complex religious situation of the Mediterranean region of late antiquity.

Prof. Rüpke will visit Japan in September and hold seminars at the University of Tokyo under the sponsorship of Prof. Hiroshi Ichikawa. Since this is a rare occasion for us to be able hear from Prof. Rüpke directly about his idea of “Lived Ancient Religions”, we have submitted a panel proposal that includes Profs. Rüpke and Ichikawa among the panelists.

The first speaker is Prof. Rüpke, who will talk about his idea of “Lived Ancient Religions.” After his presentation, other panelists will examine and expand on his idea in each of the special fields and topics.

The second speaker is Dr. Nakanishi, focusing on the traditional dichotomy of paganism vs. Christianity long employed in the study of the religions of classical antiquity. After the canonization of Christianity in the Roman Empire, the collective concept of ‘paganism’ was elaborated for the identification and classification of the religions outside of the Abrahamic tradition. This had a strong influence on the development of theories of religion in the West towards the late modern period, since it entailed discriminative views on the religions that existed long before the rise of Christianity, which the leaders of the church and authors of Christian invectives

deprecated as obsolete religions to be conquered. Since the 1990s, scholars of Roman religions have sought for explicit classifications and an appropriate narrative for the religious traditions and their practitioners in the Empire, which had been long known under the collective concept of ‘paganism’. Their attempt is a quest for the independence of studies on ancient Mediterranean religions from academic auxiliaries of Early Christian Studies. Dr. Nakanishi’s paper examines how recent studies have explored and classified the Roman religions outside the Abrahamic traditions with the concepts of ‘polytheism’, ‘traditional religion’, and ‘communal religion’.

The third speaker is Dr. Doi who believes that the appearance of Christianity with its historical consciousness caused a drastic change in the map of the religious situation of Late Antiquity. According to her, as a historical religion, Christianity came into existence in the multiple religious backgrounds in the Roman Empire, forming its own perspective of history by inheriting a salvation history view from Judaism. On the one hand, the usual description of Early Christianity consisted mainly of theological viewpoints such as canons, dogma, orders (hierarchy), church architecture, liturgies, etc. On the other hand, recent research on religious history shows a more complex religious situation in the Mediterranean region of late antiquity. Meanwhile, interest in the daily religious life of the era have increased. In historical studies, while it is not easy to capture this from the sources, it is exceedingly significant. This presentation will focus on Christianity as a historical religion, correlating Christian historical perspective and daily life, and taking notice of the catacombs as funerary areas, which appeared in the second century and continued until about the sixth century, after which churches were built.

The final speaker is Prof. Ichikawa who will focus on the concept of ‘Judaization’ in the first century Galilee district and the legalization of ritual precepts in the ordinary life of Jews there. Such a distinct Jewish way of living includes the olive press facilities in order to produce pure oil, the *miqvaot*, i.e. reservoirs for ritual bathing, stone vessels, Herodian lamps, and synagogues. It is assumed that Jews were keenly conscious of themselves as Jews in keeping specific Jewish laws. They were compelled to observe such laws in their community life. Is such an attitude in the ordinary life of Jews at that time looked upon as an aspect of ‘lived ancient religion’ conceptualized by Professor Rüpke?

Matsumura Kazuo, a comparative mythologist who has been interested in ancient Roman religion since his student days, will chair the panel and also give comments before the discussion time.

Handouts with outlines of the presentations in Japanese will be supplied. The presentations, comments, and discussions will be conducted only in English. For efficient use of time, no Japanese interpretation will be provided. We ask that questions and comments in Japanese be conducted individually after the panel session.

## 生命操作時代の宗教と宗教学—宗教的生命観を鍛え直す—

代表者：安藤 泰至

人—動物キメラ胚研究をめぐる生命倫理議論と宗教・宗教学の役割	澤井 努 (京大)
ゲノム編集した人の子を産むことを禁止する理由	島菌 進 (上智大)
生命操作の是非を越えて—悲しみと共に生きる宗教者の役割—	花岡 尚樹 (あそかビハーラ病院)
生命操作に抗して何が言えるか—「生の被贈与性」を手掛りに—	脇坂 真弥 (大谷大)
科学的生命観 vs 宗教的生命観という対立図式を超えて	安藤 泰至 (鳥取大)
	司会：安藤 泰至 (鳥取大)

約40年前(1978年)、世界初の体外受精児誕生のニュースが世界を駆け巡った。賛成派は「不妊患者に福音」、反対派は「神の領域への侵入」という言葉を使ったように、この技術は私たちの生命観の刷新あるいは崩壊に関わるような出来事として受け止められた。しかし現在、日本では17人に1人の新生児が体外受精で生まれるぐらい、それは標準的な「不妊治療」として普及している。一方で、クローン技術や幹細胞研究、ゲノム編集といった最新の生命操作技術の発展のスピードは著しく、宗教や宗教学にもそれらがもたらす深刻な倫理問題についての喫緊の対応が求められている。その一方で、体外受精や出生前診断、臓器移植などのように、すでに医療のなかに浸透し、もはやその是非自体が問われることは少なくなった従来の生命操作技術によって翻弄される私たちの生老病死の苦に寄り添う実践的ケアや知のあり方もまた、宗教や宗教学にとっての重要な課題になってきている。

最初の二人の発表者は、近年問題となっている具体的な生命操作技術をテーマに、その倫理的議論に宗教や宗教学がどのように関わるかを論じる。澤井努は、幹細胞研究の中でも特に、人—動物キメラ胚研究(動物体内で人の臓器を作製し、利用する研究)をめぐる生命倫理議論に焦点を絞る。具体的に、国内外の規制動向、および倫理議論を概観した後、日本では当該研究をめぐる生命倫理議論に宗教や宗教学が十分に貢献してこなかった点を指摘し、その背景にはどのような要因があるのか、また今後の議論においてどのように貢献できるかについて論じる。島菌進は、中国で受精卵にゲノム編集した双子が生まれ、世界に衝撃を与えた問題を取り上げる。それが倫理的に許されない行為だとする声明や論説には「現段階」ではとの限定がつく場合が多かったが、島菌は将来に向けて原則禁止すべきであること、あわせて例外的許容の条件についても考える必要があるとの論点を示し、その理由を述べる。基本的には「人

のいのちをつくる」ことは許されないという立場から問題提起する。

続く二人の発表者は、そうした生命操作技術を推進したり受容したりする人間や社会のあり方に対して、宗教や宗教学からどのように批判的な問いが投げかけられるのかを考察する。花岡尚樹は、自己中心的な営みから紡ぎ出される世界はすべて虚仮不実であり、生命倫理に是非善悪を判別するのが宗教者の役割ではないことを論じる。そして虚仮不実の身には内なる優生思想が内在し、生命操作によって自他の生が阻害される危険性を指摘する。その上で、障がいのある当事者として、いのちを如何にみつめうるのか、また、いのちを支える宗教者としてのあるべき姿を論じる。脇坂真弥は、生命操作の「超行為主体性」に対してマイケル・サンデルが主張した「生の被贈与性」という概念を取り上げ、これを生の偶然性という視点から論じる。その際に、各人の生の偶然性が単なる《差異》ではなく事実上の《格差》となりうること、その《格差》が解消がたい生の痛みを生むことを敢えて一度認めた上で、私たちがそれでもなお《ともに》生きていく可能性をどこに求めるべきかを探る。

最後に代表者の安藤泰至は、生命操作をめぐる「科学的生命観と宗教的生命観の対立」という図式には問題が多いこと、方法としての「科学」には特定の「生命観」は存在せず、生命現象をめぐる科学的な知識自体から特定の生命観が演繹されるわけでもないことを指摘する。そして生命操作技術に対する有効な批判のためには、まず「宗教的生命観」自体を医療化された生老病死の現実のなかで批判的に問い直す必要があると論じる。このように本パネルは、広い意味での「宗教と生命倫理」という問題に新しい角度から迫ろうとするものであり、フロアとのやりとりを通じて問題関心を共有し、さらなる問いや議論を喚起できるものと期待している。

## 親鸞と日本主義の間

代表者：近藤俊太郎

名和 達宣 (真宗大谷派教学研究所)

東 真行 (親鸞仏教センター)

近藤俊太郎 (龍大)

内手 弘太 (龍大)

コメンテータ：中島 岳志 (東京工業大)

司会：近藤俊太郎 (龍大)

真宗大谷派の教学と日本主義－真宗教学懇談会を通して－  
聖徳太子と日本主義－金子大榮を中心に－  
戦時下仏教教団と日本主義－真宗本願寺派を中心に－  
真宗本願寺派の教学と日本主義－梅原真隆を通して－

近代の仏教思想の大勢が日本主義と結びつくことは、すでに多くの研究者により指摘されてきた。近年では、中島岳志氏が『親鸞と日本主義』(新潮社、2017年)において、浄土教それ自体に国体論との連続性があるという問題を提起した。本パネルでは、その問題提起を重視しながらも、仏教思想それ自体に日本主義の淵源を探るのではなく、変容していく時代状況にそれぞれの思想家が即応し、仏教をいかに再編していったのかという過程の探究を目指す。

こうした視点に立てば、時代状況の全体が日本主義に回収されていく中で、個々の思想家がその時流といかに対峙しながら仏教を再構築していったのかを明らかにすることができるだろう。また、そこからは、日本主義や国体といった戦時下の支配的イデオロギーにも再解釈を加えていくさまや、単純に等号では結べない仏教思想の領野を確保すべく取り組んだ苦闘の軌跡が浮かび上がってくるのではないだろうか。

本パネルでは、この問題を、特に親鸞思想、あるいは真宗教団との関わりにおいて再考し、親鸞と日本主義の「間」を探究したい。各発表の要旨は以下の通りである。

【名和達宣】従来、真宗大谷派の教学と日本主義とをめぐめる問題は、特定の個人、とりわけ清沢満之門下の暁烏敏や金子大榮をはじめ、所謂「近代教学」に位置する人物たちの思想に焦点が当てられることが大勢であった。本発表では、近年多くの研究で取り扱われている真宗教学懇談会(1941年)について、個人の言説を抽出するのに先立ち、時代状況やそこに至るまでの経緯、さらには出席者の立場・境遇などを分析しつつ懇談会全体の議論の流れを追跡し、もって問題の所在を再検討したい。

【東 真行】十五年戦争期、仏教者の一部は、聖徳太子を援用することで、自らが信仰する仏教の地位を確保し、

あるいは時代の風潮を受容していった。浄土真宗においても、親鸞の思想と日本主義の結節点に関わるだけに、聖徳太子をどう理解するかが大きな課題となっていた。そこで本発表では、真宗教学者の金子大榮の聖徳太子観を中心軸とし、同じく真宗者であった暁烏敏の太子観や、当時の文部省または教学局から出版された太子関連の文献などを通して、戦間期の太子理解の一端を考察したい。

【近藤俊太郎】近年、教団外の思想家による親鸞論が研究対象として注目を集める一方で、近代社会で圧倒的影響力を誇った真宗教団については積極的に取りあげられない傾向にある。そこで本発表では、真宗本願寺派を事例として取りあげ、戦時教学の形成や聖典削除などの教学の再編をめぐる諸問題を分析することで、真宗教団と日本主義の関係について考えてみたい。

【内手弘太】近年、中島岳志氏によって、真宗教学が日本主義に接続する過程に「煩悶から超国家主義へ」という歴史経験が存在したことが指摘された。こうした見解は、中島が分析対象とした真宗大谷派の「近代教学」関係者については説得力を持つけれども、はたして真宗教学者一般に妥当するだろうか。そこで本発表では、真宗本願寺派教学者の梅原真隆を取りあげ、真宗教学と日本主義の関係性を再考し、もうひとつの歴史経験を探究してみたい。

なお、このたびの発表者をはじめとする執筆陣により、来春、法蔵館より論集『近代の仏教思想と日本主義(仮)』を刊行する予定であり、本パネルもその刊行準備として位置づけられる。また、コメンテータには、親鸞と日本主義の関係をめぐめる先駆的な著書(『親鸞と日本主義』)を刊行され、上記論集にも寄稿予定の中島岳志氏に就いていただく。

## 近代仏教と遠忌ーインフラ・国家・メディアー

代表者：武井 謙悟

近代化する御遠忌ー東西両本願寺の大規模事業と親鸞像ー  
 高野山の御遠忌と近代化ー大師信仰と伝統の再編成ー  
 近代曹洞宗の遠忌ー鉄道開通後の永平寺と移転後の總持寺ー  
 日蓮門下と記念事業ー降誕七〇〇年から六五〇遠忌への道程ー

大澤 絢子 (大谷大)  
 井川 裕覚 (上智大)  
 武井 謙悟 (駒大)  
 ユリア・ブレニナ (阪大)

コメンテータ・司会：碧海 寿広 (武蔵野大)

本パネルは、宗祖や中興の祖に対して50年ごとに行われる年忌法会である「遠忌」を主たる対象とする。遠忌に関する研究は、寺誌や、宗祖像(幡鎌一弘編『語られた宗祖ー近世・近現代の信仰史』2012年、法蔵館)、ツーリズム(星野英紀ほか編『聖地巡礼ツーリズム』2012年、弘文堂)に関連したものが見られるが、宗派間の垣根を越えたものは少ない。本パネルでは、異なる四つの宗派の遠忌を、国家・メディア・インフラという三つの視座から分析する。以下、各発表の要旨を記載する。

【①大澤】浄土真宗における御遠忌の歴史は、1294(永仁2)年の親鸞の三三回忌より始まる。これ以降、親鸞は「宗祖」としてイメージ化され、この親鸞像が教団の信仰を束ねる柱となった。その後、二〇〇回忌から記録が残っており、四〇〇回忌の頃には、地方の門徒たちが遠い親鸞ゆかりの地を巡るようなこともなされていた。本発表では、長い歴史を持つ浄土真宗の御遠忌の近代化の象徴として、1911(明治44)年の六五〇回忌を取り上げ、大規模な参拝者輸送体制と建設事業の実態を検証しつつ、遠忌史を通じての親鸞の「人間化」プロセスを明らかにする。本発表により、1923(大正12)年の立教開宗七〇〇年記念法要や現代の各種大規模法要に通じる組織構造を捉え、近代教団史に対する新たな知見を加えたい。

【②井川】近世以前の高野山における遠忌の情報は定かではなく、本格的な事業の開催は近代を待つことになる。1884年の一〇五〇年御遠忌は明治初期の混乱によって低調に終わったが、1934年、高野山において弘法大師入定一一〇〇年御遠忌が「祖山を中心とする諸種の報恩事業」として大々的に開催された。山内の伽藍整備や教化活動をはじめ多数の事業が催されたが、中でも弘法大師研究の刷新や御詠歌講の組織化が行われるなど、伝統を再編成する形で「大師信仰」が確立された点は注目に値する。本発表では、インフラ・国家・メディアの観点から一一〇〇年御遠忌を考察し、高野山の伝統と近代的諸要素がいかに結び

ついたのか、その特徴と意義を明らかにする。

【③武井】曹洞宗は、永平寺と總持寺を二大本山とし、両本山の開祖と二祖を中心に遠忌を実施している。本発表では近代の遠忌のうち、永平寺に関しては、鉄道、道路の整備後、多くの参拝者があった1930年の二祖懷奘の六五〇回遠忌を中心に扱う。ここでは僧侶中心の行事から、鉄道会社と提携した広告など一般参加者を意識したものに変化する。一方、總持寺に関しては、1911年の石川県能登から神奈川県鶴見への移転後に行われた三度の遠忌(峨山五五〇回忌、瑩山六〇〇回忌、後醍醐天皇六〇〇回忌)を取り上げる。移転後の伽藍整備と関東大震災からの復興、地域に總持寺が根ざす過程と、1937年には總持寺と縁のある後醍醐天皇の遠忌を創始するに至る国家との関係を明らかにしたい。

【④ブレニナ】日蓮の遠忌法要が盛大に行われるようになったのは江戸時代の四五〇遠忌(1731年)の頃からとされる。当時は日蓮が「御祖師様」と呼ばれ、とりわけ江戸で日蓮信仰が人気を博した。寺社参詣の流行や交通整備の影響もあり、多くの人々が遠忌に動員されるようになった。近代になるとその規模がさらに拡大する。なかでも、それまで各門流で修していた行事とは違い、1931年の六五〇遠忌は日蓮宗あげての初めての遠忌事業となった。しかし、宗門内外の盛り上がりはすでに降誕七〇〇年を記念する1921年のころから見られる。そこで、本発表では、インフラ・国家・メディアという軸を中心にその二つの記念事業を考察し、近代日蓮仏教における遠忌の特徴とその意味づけを明らかにしたい。

以上の発表後、上記『聖地巡礼ツーリズム』で本願寺の遠忌を扱い、近代仏教の入門書を執筆するなど、幅広い見識を持つ碧海寿広氏がコメントを行う。限られた宗派間であるものの、遠忌の比較を通じて、近代仏教研究に新たな視座を提供したい。

## イスラーム中世における神認識

スフラワルディーにおける照応—天使論にむけて—  
 イブン・アラビー思想における神の顕現と人間の心  
 ジーリーの存在の自己顕現論におけるムハンマドとアダム  
 イージーにおける神認識と世界

代表者：澤井 真  
 小野 純一（自治医科大）  
 相楽 悠太（東大）  
 澤井 真（天理大）  
 中西 悠喜（日本学術振興会）

コメンテータ：野元 晋（慶大）  
 司会：澤井 真（天理大）

中世期のイスラーム、特に12世紀以降において、神認識をめぐる議論は、神・人・世界をめぐる思弁的なものへ変容し、精緻化されていった。イスラームにおける諸学問分野は、それぞれのコンテキストを背負い、隣接する学問分野と互いに影響しながら神—超越的実在—を論じた。このことは、神認識をめぐるイスラーム思想が神と人間の関係性を改めて問い直したことを意味する。言い換えれば、思想家たちは、過去の議論を引き継ぎながら、神、人間、そして神と人間の連関について論じたのである。

本パネルの目的は、イスラーム思想が本格的に花開く転換点である中世期において、超越的実在としての神が、創造物や世界をめぐる議論のなかでいかに捉えられたのかを問うことにある。そこで、イスラームの哲学、神学、そして神秘主義に焦点を当て、ムスリムの思想家たちが「神」をいかに認識したかを考察する。

小野純一は、スフラワルディー（d.1154）が神認識と天使の顕現をどう了解したかを、アリストテレスやイブン・スィナー哲学との対比から考察する。ゾロアスター教・マツダ教・マンダ教などが、スフラワルディーの天使観に影響したことは先行研究が詳らかにしている。しかし天使観を歴史的起源に還元する歴史理解において、神を認識しようとする当事者の思考そのものは傍らに置かれざるをえない。発表では『照明哲学』の想像力論に見る。それによって神の現れとその過程としての天使の現れが照応の形式を通して無限と認識されることを描出し、体験の本来性に焦点を当てる。

相楽悠太は、イブン・アラビー（d.1240）の靈魂論を主題として、彼の思弁的神秘主義においてスィナーの靈魂論が新たな様相を見せることを議論する。イブン・アラビーの「顕現」論は、専ら神の顕現の場としての世界を論じ

る宇宙論的教説として知られ、彼以前の体験中心的神秘主義思想の基本的概念である「心」が顕現の認識主体としてそこに組み込まれたことの意味は、従来さほど積極的に評価されない。本発表では心と顕現をめぐる彼の教説を分析し、体験主体としての心との関係性にに基づき前代の神秘主義思想との連続性の中で「顕現」論を捉え直すことを目指す。

澤井真は、イブン・アラビー学派の学者ギーリー（d.1424）を考察し、神認識を目指す彼の議論が、同時に彼の人間論であったことを指摘する。存在一性論において、完全人間（理想的な人間の在り方）の議論は重要な役割を占めている。イブン・アラビーの『叡智の台座』のなかでは、アダムこそが完全人間の原型と指図されるが、後の注釈的伝統では異なった見解が示されている。本発表では、神と人間の関係性についての考察を通して、神秘主義における神認識の変遷を辿る。

中西悠喜は、イージー（d.1355）の『神学教程』を例に、神認識と自然探究との関係を考察する。世界は神の創造の奇蹟に満ちている。このような信念から、前近代のムスリム学者の多くは世界、あるいは自然への探究を信仰の重要な一角をなすと見なした。イージーもまたこの立場を代表し、その神認識（神学の定義）には彼の世界観／自然観が色濃く反映している。本発表では、これらのテーマをめぐる彼の諸議論を分析することで、14世紀当時の神学（カラム）において神と世界がどのような関係のもとに観念されていたか、その一端を描き出す。

上記の4発表に対して、野元晋はイスラーム思想全体を俯瞰する視点を交えてコメントや質問を行う。さらに、全体討議ではイスラーム思想を多角的に検討することで、イスラームにおける神認識の解明を目指す。

## 近代宗教政策下における「教団」未満の宗教者たち

代表者：石原 和

井上 智勝 (埼玉大)

石原 和 (国立民博)

並木 英子 (国際基督教大)

コメンテータ：永岡 崇 (駒大)

司会：石原 和 (国立民博)

「本所」としての大成教

稲荷講社と出口王仁三郎—講社所管教会という視点から—  
神道御穂教会と宮城島金作

本パネルは、近代の宗教政策のもと、近世に由来する宗教活動を行っていた「教団」未満の宗教者たちが、どのような活動をしていたのか、またその活動を行うにあたっていかにして公的な根拠を得ていたのか(得ようとしたのか)を考察するものである。

民衆の自立や近代性と国家への抵抗を旨としてきた民衆宗教研究は、天理教や金光教などに対象を限定した上で、その歴史的意義を見出す傾向があった。そのため、同じく教派神道として活動した教団でも政府と近いとされる教団や、呪術的な活動を維持してきた「教団」未満の活動についてはほとんどその視野に入れられてこなかった。しかし、近年の宗教研究の進展によって従来の研究が抱えていた近代主義的な視線が省みられるようになり、実は近代の宗教動向が常にその境界が流動するものであり、簡単にはカテゴリー化できないものであることが認知されつつある。

こうした宗教史研究の現状を踏まえ、本パネルでは、民衆宗教を中心としつつもその裾野までを広く捉え、具体的な事例を挙げながら近代宗教活動のヴァリエーションを提示することで、近世から近代へと展開していく宗教史像を再構築していくための展望を示したい。各発表の要旨は以下の通りである。

井上発表：教派神道研究は、天理教や金光教など、近代天皇制を相対化すると評価された教派を中心に展開されてきた。反対に、天皇制を擁護する立場にあった大成教などの教派が検討されることは少なかった。だが、天理教や金光教の草創期と同じ層位にありながら、教義の具備や大規模な教団化をなし得なかった小信仰集団の中には、大成教の傘下に入って活動を正当化したものが多かった。教派神道への理解を深めるためには、かかる大成教の性格を検討することも重要である。以上の認識から本発表では、近

世以降の「宗教未満」の小信仰集団の活動と、それらの活動を正当化する大成教の性格を検討し、「宗教未満」をめぐる近世・近代の連続・非連続を見通す作業を試みる。

石原発表：長澤雄楯の稲荷講社と後に大本の教祖となる出口王仁三郎の初期の活動の関係について、長澤が神職を務めていた月見里神社(静岡県静岡市清水区)からの新出史料を用いて明らかにする。長澤は鎮魂婦神法を中心とする活動を展開していた。その活動の場となった稲荷講社は近代宗教政策下において、教派神道傘下の講社として宗教活動の公認を得ていた。その一方で、稲荷講社はその傘下に王仁三郎はじめとする教団未満の宗教者たちを収め、「所管教会」とすることで彼らの活動の後ろ盾の役割を果たしていたという側面も持っていた。以上の事例を通して、講社とその管下の所管教会の活動や相互関係の諸相を示していく。そこには教団未満の講活動から近代教団への第一歩も見えてくるであろう。

並木発表：大正期に静岡県静岡市に存在した御穂神社崇敬教会・神道三穂教会とその神主であった宮城島金作について、資料調査にもとづき、その実態を明らかにする。神道三穂教会・神主・宮城島金作は本田霊学の継承者である長澤雄楯が最初に見出した卓越した霊能者であったといわれている。明治二十七年には長澤雄楯が審神者となり、宮城島金作を神主として日清戦争の状況予言が実現したという。(鈴木重道『本田親徳研究』山雅書房、1977年。)本発表では、宮城島金作の霊的経験と神道三穂教会の設立過程、および、教会内での宗教実践を考察しつつ、三穂教会における本田霊学の受容の諸相を考えていく。

以上の発表に対する理論的研究の視点からの永岡コメントによって、パネル発表の中で示された諸事例の意義の明確化をはかり、そこから近代日本宗教史の全体を照らす視座を展望する。

## 越境する教派神道—組織化における交渉・葛藤・分裂—

越境する教派神道—組織化における交渉・葛藤・分裂—  
 金光教と黒住教にみる組織形成の葛藤  
 実行教の組織化における非富士信仰の要因  
 大成教に包括された近世教化活動

代表者：弓山 達也  
 弓山 達也 (東京工業大)  
 藤井 麻央  
 今井 功一 (戸田市役所)  
 荻原 稔 (国際日文研)  
 司会：弓山 達也 (東京工業大)

パネルの目的は、教派神道における各教団内外の越境、つまり交渉ゆえ生じる葛藤、分裂を事例に、一般に明治宗教政策の産物とされ、制度として固定化したイメージ、あるいは逆に雑多な講社の寄せ集めのように見える教派神道の組織化のダイナミズムを明らかにするものである。そこには宗教運動が、一つの核に収斂していくと同時に、相互交渉・影響関係から自らを組織化していく、その過程に焦点をあてていこうという私たちの戦略がある。

さて上記のように、教派神道は「明治政府の宗教政策の羽翼」(村上1963:41)、「発展するためには(略)政府の心を己れの心として生きることを余儀なくされた」(笠原1977:227)と、宗教政策の落とし子と見なされやすい。そのため教派神道は制度として見る限り「敗戦によって(略)事実上、解体した」「存在理由を失わせた」(村上1982:116)という評価もある。一方、井上順孝(1991:125)は教派神道を分析概念としてとらえ、神道系新宗教との対比で、組織化に関して樹木モデルに対する高杯モデルを提起している。その上で「きわめて柔軟な、見方を変えればすこぶる無原則と言えるような組織結集原理」を指摘している。

教派神道の各教団の研究は、樹木モデルの形態をとる天理教や金光教に強い関心を示してきた。鶴藤幾太(1939:44-56)のいう「純粹派」「独創派」(黒住・金光・天理)にこそ、宗教運動らしい魅力があるのかもしれない。しかし私たちは、「異質な宗教運動が雑居する」中での「緩やかな等質性」を基盤とした「連合、連携、提携」(井上1991:126-127)、「信仰上の異分子を混合包括」による「融通性」(鶴藤1939:48)にこそ注目し、純粹・独創とみなされる教団にも、かかる側面があることを指摘し、ここに教派神道の、さらには宗教運動の重要な特徴を見出そうと企図した。

以上のような視点から、パネルでは冒頭に弓山が主に天理教と神習教との間で分裂していく明誠講社の事例を取り上げて主旨説明を行う。

藤井は、金光教や黒住教が神道教派として組織形成を行う過程で、各地の講や講社を一教派の構成単位として位置付けることで生じた軋轢や分裂的状況の事例を示す。「純粹派」「独創派」といわれるこれらの教派においても様々な信仰営為が存在し、集団としてまとめることは容易でなかった。そうした様相を観察しながら、教導職制廃止と管長制導入を背景にした組織化は地域に根差した信仰営為にどのような変化をもたらしたのか、その結果として成立していく教派としての組織の特質とはいかなるものか検討する。

今井は明治期実行教の組織形成に焦点を当てる。実行教の組織形成については明治15年の一派特立以来、国の制度に規制されながら形を整えると同時に、内部では若い国学者や漢学者などが組織や活動について理論的に主導していた。富士信仰を基礎に持たない彼らは明治30年前後には、神道改革を標榜して富士信仰にとどまらない言論を展開し、結果的に教団を去り国学や漢学をもとにした運動に向かう。彼らの教団内外での活動の影響を考察する。

荻原は、大成教会(のちの大成教を含む)の傘下に入った禊教、淘宮、俳諧の三つの講社の事例を通じて、平山省齋が、神祇信仰の在り方を広範にとらえて、近世以来の様々な教化活動を神道教派の中に取り込もうとする意図をもつ一方、それらの活動の側でも新しい時代における法的な根拠を獲得しようとする積極的な相互関係があったことを示す。また、そうした活動内部の対立や分裂さえも吸収していく構造として、惟神教会という別の組織を活用していたことにも言及する。

なお各発題後は相互に質疑応答を行い、ただちにフロアに議論を開いていきたい。

[引用文献] 井上順孝 1991『教派神道の形成』弘文堂。  
 笠原一男編『日本宗教史Ⅱ』山川出版社。鶴藤幾太 1939『教派神道の研究』大興社。村上重良 1963『近代民衆宗教史の研究(増訂版)』法蔵館。同 1982『国家神道と民衆宗教』吉川弘文館。

## 宗教研究における井筒「東洋哲学」とその展開

代表者：澤井 義次

井筒「東洋哲学」におけるモッラー・サドラー存在論の位置づけ	鎌田 繁 (東大)
井筒「東洋哲学」とハイデガーの言語哲学	フアン・ホセ・ロペス・パソス (天理大)
井筒俊彦の言語アラヤ識と上田閑照の根源語	氣多 雅子 (京大)
井筒「東洋哲学」構想とイブン・アラビー解釈に潜む問題点	仁子 寿晴 (同志社大)
井筒俊彦の哲学的意味論とシャンカラの哲学	澤井 義次 (天理大)
	司会：澤井 義次 (天理大)

このパネルは、イスラーム哲学・東洋思想の研究者として知られる井筒俊彦が構想した「東洋哲学」について、比較宗教学的な視点から、その思想的展開性を探究する試みである。各パネリストは、各自の専門分野の視点から、井筒の哲学的思惟の特質を明らかにするとともに、井筒が関心をもっていた個別の宗教哲学と比較考察しながら、井筒「東洋哲学」の展開を模索する。

まず、鎌田はイスラーム思想の中でも、井筒が主体的な関心をもって研究したモッラー・サドラーに注目する。彼はイブン・アラビーとともに、井筒が関心を寄せた思想家の一人であった。彼はイブン・アラビーの強い影響下で、より厳密な理論的枠組を構築することで自らの思索を表現した。特に存在と本質についてその概念とリアリティの観点から取り上げ、存在の本源性の主張に至る彼の思索は、井筒「東洋哲学」でも重要な柱となっている。こうした問題意識から、鎌田はモッラー・サドラーの思索を井筒がどのように理解し、受容したかを考察する。次にロペス・パソスは井筒の言語哲学をハイデガーのそれと比較しながら、その「言葉・コトバ」の理解を明らかにする。「存在」を中心に展開してきた西洋哲学がニヒリズムによって軸を失ったとき、ハイデガーは『存在と時間』で「存在への問い」の復活を試み、『ヒューマニズムについて』では「言葉」を「存在の家」と規定した。一方、井筒「東洋哲学」では、コトバの意味分節作用によって本質の世界が生成されるという。つまり、ロペス・パソスは井筒「東洋哲学」の「コトバ」の概念から、ハイデガーの言語哲学を読み解くことが可能であるのかを考察する。

さらに氣多は、井筒俊彦と上田閑照がともに神秘体験や禅体験の深い理解に基づいて、言葉の始原について卓越した研究を行ったことに注目する。井筒は、共同体の言語を学ぶことはその文化の定める存在分節体系を摂取するこ

とであり、その分節体系はその言語を使用する人の文化的無意識の領域に沈澱すると考えて、それを「言語アラヤ識」と名付けた。上田閑照は言葉の世界が展開される元のところに「言葉から出て、言葉に出る」という極限的転換運動があると考えて、言葉を失ったところから言葉がはじめて発せられるその出来事の始動の原音を「根源語」と呼んだ。氣多は両者の思想を比較し、その共通するところ、相違するところを明らかにすることで、井筒の言語思想の意義を考察する。仁子は井筒の「東洋哲学」構想が、イスラーム文化に焦点を当てた一連の英語著作で理論的に(方法論的に)整備された側面をもっていることをふまえて、特定の文化でなく文化一般に拓く局面で、イブン・アラビーの思想に特に重要な意味が付与されると捉える。さらに、日本語著作でもイブン・アラビーがイスラーム文化のなかで別格に扱われるように見えるという。つまり、井筒がイブン・アラビーをいかに理解したのかを探り、その理解に決定的に欠落する視点があること——それはイブン・アラビーだけでなく、宗教研究におけるイスラーム文化一般の理解にも影響を及ぼす——について考察する。

さらに、澤井は井筒俊彦の哲学的意味論をシャンカラのヴェーダーンタ哲学と比較しながら考察する。シャンカラは存在世界の「マーヤー」(幻妄)的仮現性を強調したが、井筒はシャンカラが説いた「マーヤー」的意識の構造を東洋の言語哲学の根源的パターンとして捉えた。澤井は井筒のシャンカラ理解をとおして、井筒の哲学的思惟の本質的特質を明らかにし、その思想的展開性を探究する。最後に、5名の研究発表の終了後、パネルに参加した全ての研究者とともに、井筒「東洋哲学」とその展開可能性に関する討議をおこなう。つまり、本パネルは井筒「東洋哲学」を現代の宗教研究の一つとして捉えて、井筒「東洋哲学」とその理論的展開の可能性を模索する一つの試みである。

## 宗勢調査の可能性と個別課題へのアプローチ

質問紙調査による実態把握や将来予測としての宗勢調査調査を通して見えてくる過疎地寺院の課題調査を通して見えてくる寺院と葬祭・墓地問題のこれから

代表者：川又 俊則  
相澤 秀生 (跡見学園女子大)  
平子 泰弘 (曹洞宗総合研究センター)  
問芝 志保 (国際宗教研究所)

コメンテータ：村上 興匡 (大正大)

司会：川又 俊則 (鈴鹿大)

半世紀も実施されている曹洞宗や浄土真宗本願寺派の宗勢調査以外に、日蓮宗や真宗大谷派など他宗派においても、継続的な宗勢調査が実施されていることは周知の通りである。そして、それぞれの調査項目や報告内容も精選され、各宗派の教団附置研究所や、研究者が参加する調査委員会による調査結果に関して、この人口減少時代において、檀信徒たちからの注目も集まってきている。だが、半世紀前、仏教各派の宗勢調査について森岡清美は、その意義を認めつつも、社会調査の専門家による調査でないことから、研究対象とすることに躊躇していた。本パネルメンバーは、さまざまな形で仏教各派の宗勢調査にかかわりを持ち、また、その報告を目にし、論じてきた者である。仏教教団により寺院や住職を対象に実施されてきた宗勢調査を、広く学術研究の対象として論ずることが本パネルの第一課題である。

本パネルで主に取り上げる対象は、2015年に実施された曹洞宗宗勢総合調査である。司会および報告者たちは、その調査委員会メンバーに任免され、得られた結果を報告書としてまとめ、その後、『岐路に立つ寺院』という著書も刊行した。しかし本パネルでは、それらで扱われた内容をダイジェストするものではない。研究の素材としてはその調査結果を用いるものの、むしろ、宗勢調査の知見として得られた仏教教団の在り方や、今後の仏教教団予測など、仏教教団が主体となって行う宗勢調査の可能性と重要な個別課題について、自己省察および、他宗派の調査結果などとの比較検討を中心に論じることが本パネルの中心的話題である。報告書では扱えなかった角度からの議論を行い、重要な個別課題としては、東京への一極集中状況と同時に進行している過疎地域の拡大状況と葬祭について扱う。

第一報告の相澤は、仏教教団が実施する「宗勢調査」に焦点を当て、「曹洞宗宗勢総合調査」を主な題材とし、そこで明らかになった問題(寺院経済の格差の拡大、寺院後継者予定者の減少など)を数量的・質的な面から概観する。そのうえで、質問紙調査による実態把握や将来予測としての宗勢調査がもつ宗教研究上の利点や課題などを報告する。

第二報告の平子は、宗勢調査では、社会に応じた変化という寺院の状況を捉えようとしていることを掘り下げる。過疎地寺院における状況も調査の分析から見えてくるが、曹洞宗の調査で示される過疎地寺院の実態だけでなく、他宗の調査や現地調査(「過疎地問題連絡懇談会」が立ち上げられ、共同調査なども行われている)から確認できる状況を含め、過疎地寺院というテーマへの各種調査の有効性や活用法について論ずる。

第三報告の問芝は、曹洞宗の宗勢調査が、葬儀・年忌法要・墓地等についても多くの質問項目を設定している点に特色を持ち、その量的分析は日本の葬送墓制研究の進展にも大いに寄与するものといえるという認識で論ずる。調査結果の一部を紹介しながら、特に「無縁墓」や「墓じまい」の増加といったアクチュアルな問題のゆくえを考察する。

これらの報告を受けて、村上が総括的にコメントを述べる。それへの報告者からのレスポンスの後、フロア全体と本パネルのテーマについて論ずる。各宗派における宗勢調査に対して、教団間の情報共有が乏しいことや、共有のテーマや課題の比較なども議論し、参加者とともに、今後の宗教界を論ずるに値する貴重なデータについて、「協働の可能性」も探りたい。

## 陰陽道祭祀の形成と展開－奈良暦師吉川家文書を中心に－

古代陰陽道の展開

中世陰陽道と占い

近世陰陽道祭祀の伝播

吉川家伝来「土公神祭文」－その信仰および文芸的特徴－

代表者：梅田 千尋

細井 浩志 (活水女子大)

赤澤 春彦 (摂南大)

梅田 千尋 (京都女子大)

松山由布子 (国立歴史民俗博)

コメンテーター・司会：小池 淳一 (国立歴史民俗博)

奈良暦師吉川家文書は、近世奈良陰陽町の暦師・陰陽師であった吉川家に伝来した文書・典籍の一括資料である。現在は国立歴史民俗博物館（以下、歴博）に収蔵されている。その内容は奈良暦およびその原本になった写本暦、さらに暦師・陰陽師としての活動を示す陰陽道関係の典籍類、祭文、祝詞、次第書なども含まれている。

この吉川家文書の特色は、地方暦の刊行にまつわる史料と陰陽師としての活動に関わる史資料が、ともに残存しており、双方の関連を解明しうる点にある。歴博では2018年度より三ヶ年計画で共同研究「奈良暦師吉川家文書を中心とする暦・陰陽道研究の史料基盤形成」（研究代表・梅田千尋）を開始し、吉川家文書を中心として、陰陽道史研究の基盤を、多面的な利用が可能なかたちで形成するための調査・分析作業をおこなっている。これによって安倍晴明をはじめとする陰陽師の活動についても史資料に基づいた歴史的な実像を提出し、従来の好事家的な関心にもとづいたイメージにも終止符をうつことが可能になると思われる。さらに近年、吉川家に残されていた史資料も新たに収蔵することとなり、近世奈良における陰陽師の活動を示す研究環境の整備が進みつつある。

本パネルはこうした共同研究の成果の中間報告として、吉川家文書を基軸に、陰陽師の活動を古代・中世・近世の時代ごとの様相を探り、さらに説話・民俗の観点からも検討を加えて、その成果を提示したいと考える。なお、すでに『歴博』210号（2018年9月発行）で「特集・暦の文化史」と題して、本共同研究の成果の一部として、日本社会における暦の展開と研究上の課題についての概略を提示しているほか、吉川家文書に関する基礎的な情報および着眼点について小田真裕（船橋市郷土資料館・近世史）に紹介してもらっている。

今回のパネルでは、以上をふまえ、陰陽師が担っていた呪法や占い、祭祀などに焦点を絞り、史資料に即した位置づけを試みたい。

細井浩志（活水女子大学・古代史）は「古代陰陽道の展開」と題して、吉川家文書の「奉御立願安産鎮祭神符守護之事」「平産之符」「(八卦書)」などを使い、呪符の観点から古代陰陽道の展開をみていく。ある程度の継承関係があるのではないかとと思われる。

赤澤春彦（摂南大学・中世史）は「中世陰陽道と占い」と題して、吉川家文書に残る文亀3年（1503）の「十二星占写」を用いて、中世後期の占いについて検討する。本史料には五行に基づく姓名占いや合戦の吉日、兵法の秘術など戦国期固有の占いが看取される。

梅田千尋（京都女子大学・近世史）は「近世陰陽道祭祀の伝播」と題して、吉川家文書に伝来する陰陽道祭祀史料について系統的に検討する。朝廷の陰陽道祭祀を担っていた土御門家にも、吉川家文書と類似する祭祀史料が伝来していることから、両者を比較することで、陰陽道祭祀の実践や地域差・階層差を明らかにしたい。

松山由布子（国立歴史民俗博物館・説話文学）は「吉川家伝来「土公神祭文」－その信仰および文芸的特徴－」と題して、吉川家文書のうち「土公神祭文」に焦点を当てる。全国に伝えられる他の「土公神祭文」との比較を行い、吉川家本に説かれる陰陽道の信仰や宗教説話の特徴について報告する。

全体の司会とコメントは小池淳一（国立歴史民俗博物館・民俗学）が担当する。陰陽師の活動を通史的にとらえていく意義と可能性を焦点化するほか、討論のなかでは吉川家文書の特徴と、陰陽道関係資料の分析に関する留意点なども整理していきたいと考えている。

## 娯楽メディアと宗教表象ーインド映画に現れた宗教世界を中心にー

代表者：山下 博司

アントニー・スサイラジ (南山大)

映画『ボンベイ』における宗教的対立の分析

宗教批判と作品批判ー映画『PK』受容の二極分化と価値の相克ー 山下 博司 (東北大)

日常のなかの宗教ー新中間層映画『ランチボックス』の事例からー 岡光 信子 (中央大)

コメンテータ：田中 鉄也 (国立民博)

司会：山下 博司 (東北大)

本パネルは商業映画とそこに表出された宗教世界のもつ意味について、3作品をもとにアントニー・スサイラジ(南山大)、山下博司(東北大)、岡光信子(中央大)が発表し、さらに田中鉄也(民博)が包括的視点からコメントを加える。

インドは「宗教の国」と言われる。インド映画も草創期から宗教と深く結びついてきた。一方で、「宗教」は映画制作において極めてセンシティブなテーマであり、宗教を扱った作品が社会で論争の的になった事例も少なくない。

その代表が『ボンベイ』(1995年)である。この作品は、異宗教間結婚の夫婦という不自然な人物設定に立ち、家族が宗教暴動という「非日常」に巻き込まれていく顛末を描く。1992~93年のヒンドゥーとムスリムの宗教暴動をオープンセットに再現し、暴力を強調することで、宗教の融和の必要性に向けた作者の主張が前面に押し出される。しかし本作品は忠実に現実を映したものというより、真実に巧みな加工が施され、作者の意図に適うよう仔細に手が加えられている。そこでは現実社会の宗教多元性が2宗教の対立の図式に捨象され、被害者と加害者すら逆転するなど、故意に歪められた映像をもとに宗教間融和への願いが語られているのである。本発表(スサイラジ)では、画面分析やストーリー分析を用いて宗教と映像をめぐる論点を浮かび上がらせる。

この作品と同様、宗教を真正面から扱って大ヒットを記録したのが『PK』(2014年)である。本作品では、宇宙から地球に降り立った主人公が「神」を探す中で遭遇する既成宗教の矛盾や負の側面や、呪術性、世俗性、拝金主義にまみれた現代宗教のあり方が、宇宙人の奇妙な体験の連鎖を通して批判的に描出される。宗教そのものへの糾弾は巧みにかわされ、また多くの宗教をやり玉に挙げることで、特定宗教に矛先を向けることも注意深く回避されている。ここにあるのは、宗教がもつ欺瞞性、偽善性、危険性の故

意の強調であり、日常性とは別次元の宗教の一面である。本作が、宗教批判を借りたコメディとして成立しているのも、誇張に立脚した諷刺、揶揄、皮肉、当てこすりが、メルヘン仕立ての語りの中にうまく採り込まれているからである。本発表(山下)では、作品をめぐる言説や反響の分析を通じて映画と宗教の関係性に迫る。

両作は宗教をめぐる強いメッセージ性を有する作品で、インドの宗教がもつ暗部に敢えて光を当て、世論を喚起してセンセーションを巻き起こした。そのことも幸いして興行的成功を収めたことでも両者は共通している。

これらと異なる方向性を示すのが「新中間層映画」と称され得る作品群で、その代表が『ランチボックス』(2013年)である。ムンバイを舞台に、偶然間違えて届けられた弁当がとりもつ孤独な男女の出会いと心の交流を描く。本作では、至る所に「宗教」が顔を出してはいるものの、強調も歪曲もされことなく淡々と描き込まれ、人々の何気ない心象風景の中に融解している。他の2作と異なり、この作品では宗教は物語の中心的な位置を占めていない。宗教は個人の意識、価値観、生活空間に支配的な力を行使する存在としてではなく、都会の何気ない一コマとして作品中に静かに息づいているのである。インドの娯楽映画で、デリケートで扱いにくい対象とされてきた「宗教」が、新中間層映画の出現により、特異かつ恣意的な文脈を逃れて普通の生活に溶け込んだ一要素として描かれ、都会の日常を生きる人々の虚飾を離れた宗教性が、映画作品に忠実に反映されるようになったことは特筆に値する。本発表(岡光)では、ナラティブ分析の手法も加えて、作品中で「宗教」がもつ意味と役割とを考察する。

3作品はどれも宗教なしには成り立ち得ないが、宗教の位置づけとスタンスの対照は際だっている。

以上の発表内容を踏まえ、コメンテータとして、田中が大局的な観点も交えて映画と宗教の問題を深化させる。

## 人工知能の社会実装化が提議する宗教的問題

代表者：木村 武史

木村 武史 (筑波大)

永原 順子 (阪大)

小原 克博 (同志社大)

濱田 陽 (帝京大)

師 茂樹 (花園大)

司会：木村 武史 (筑波大)

AI と人工的他者性

AI が描く異界観とは—伝統芸能の事例から—

自然と人工物の境界に関する宗教倫理的考察—憑依する人工知能—

宗教伝統、ヒューマニズム、AI における人間観の共存

森政弘の仏教思想と AI・ロボット開発

AI の技術的進歩に伴い、様々な社会領域への応用が試みられている。それに伴い宗教と技術との関係が従来とは異なる様相を呈し、新たな問題が提議されるようになると予想される。AI 技術が社会において様々な役割を果たすのが期待される中で、最近の説明可能な AI に関連する議論が提示するように、技術革新の社会的受容には解決すべき課題も多い。それらの中で、AI が人間の精神生活に及ぼす影響についてはまだ十分に議論がされていないのが現状である。

昨年度のパネル「技術社会と宗教」でフロアから出された質疑やそれ以降の研究会での討論を踏まえて、今年度は、最初に宗教学の理論から提示できる問題点を提議し、その後、具体的な AI 技術と個別の宗教伝統との関係の中で提議される問題点を中心に論じる構成とし、現代社会における技術と宗教の問題への貢献とする。

木村武史の発表概要は以下の通りである。

AI が自己学習を通じて新たな知識を創出する可能性が示唆している問題を、宗教学の理論の中から他者性の問題との関連で捉える観点を提示する。特に AI が人工的他者として人間社会の前に現出し、それが同時に人間に人工的ではない自然的特性（あるいは、人工的他者に照射される自己としての自然的他者）への探求を促すという可能性を取り上げる。宗教の現場における AI の応用はまだ十分には実現化されていないが、その途上と見なせるロボットの応用は少しずつ見られる。幾つかの事例を参照しながら、考察を加えてみたい。

永原順子の発表概要は以下の通りである。

日本の芸能文化も、他分野と同様、AI の技術発展の影響を大きく受けている。演じ手側においては、演目の新作や演出方法など、観客側においては、享受の方法や情報共有など、多岐にわたっている。そもそも技術の発展は芸能の進化・伝承・拡散と大きく関わってきた。その関係性が、芸能が描き出す架空の世界（あるいは虚構）の特徴を生み出しているともいえる。この世界は此岸と彼岸の双方を含

んでおり、人々の異界観や信仰心の基盤ともなっている。本発表では、具体的事例を示しつつ、AI のもたらす異界観について分析していきたい。

小原克博の発表概要は以下の通りである。

近年、ヒトゲノム編集に代表されるように、「自然—人間—人工物」という伝統的な（特にキリスト教世界において顕著に見られた）境界設定が崩れつつある。生命現象をモデルとする人工知能研究においても、その傾向がある。自然と人工物の「非区別化」が進展する状況に対し、宗教倫理的視点から課題を指摘する。また、人工知能は、その最適化能力によって、様々な無駄を省き、決定に至る近道を統計学的に示すが、最適解から逸脱する「偶然性」「偶有性」に積極的な意義を与えてきた宗教伝統に対する影響を考察する。

濱田陽の発表概要は以下の通りである。

人工知能 (AI) など新たなテクノロジーの急激な発展で人の存在をアルゴリズムとデータの流れとしてとらえる人間観が一般社会にまで影響を及ぼしつつある。尊厳を有する個人として人の存在をとらえるヒューマニズムの人間観、人の存在の尊さを説きながらもその生死の意味を、神仏など人知を超える存在との関係でとらえてきた宗教伝統の人間観との共存は果たして可能か。新テクノロジー、人、神仏への信念のゆらぎを経験し、その使い分けを日常強いられる現代人という問題意識から人間観の共存の課題を主題化、整理し、その糸口を考察する。

師茂樹の発表概要は以下の通りである。

日本のロボット研究の先駆者である森政弘は、長年参禅をした仏教者としても知られている。その仏教関連の著作は、AI やロボットなどの開発倫理に関する国際的なガイドラインにも引用されるなど、大きな影響力を持っている。本発表では、森政弘の仏教思想を批判的に検討した上で、AI やロボットをめぐる議論への仏教思想の応用可能性について検討したい。

2019年7月8日発行

編集・発行 日本宗教学会 第78回学術大会 実行委員会

〒120-0045 東京都足立区千住桜木 2-2-1 帝京科学大学内

HP : <http://jpars.org/conference/>